

悲しみを歌に

大学時代にシャンソンの訳詞を手がけたのを機に、作詩家の道を歩むことになりました。創作を通し内面と向き合うことで、トラウマを少しずつ解消することができた気がします。私の作るいくつかの歌には満州時代の悲しみ、苦しみ、絶望などの心情が投影されています。例えば弘田三枝子さんが歌った「人形の家」。愛する人との別れの悲しみを「ほごりにまみれた人形みたい」と表現したが、それはあかやシラミにまみれた満州の収容所で、使役に引っ張られた父との別れの情景を思いながら書いたのです。周囲から、「なかにしさんの書く別れはあまりに重い」と言われたものです。

一方、私は少年時代から「小説家になりたい」と思っていました。長じるにつれ、満州での戦争最末期から引き揚げまでの1年2か月のことは、何が何でも書き残し、後世に伝えたいと考えるようになりました。1997年に「兄弟」で本格的に作家デビュー。その4年後に母を主人公に戦争体験を描いた「赤い月」を完成させた時、自分がこの時代に生きた証しを形にできたと思ったのです。

戦争から75年が経過し、その惨禍を知る者はごく少数になっています。だからこそ、若い世代が自らの意思で、戦争の実態と向き合い、学び、何かをつかみ取らなくては、戦争の記憶を次代に引き継ぎません。その一助となるため、これからも自らの戦争体験を発信していきたいと思います。